

各関係機関の長 殿

鹿児島県病害虫防除所長

平成27年度技術情報第19号（ジャガイモの疫病）について（送付）

ジャガイモの疫病について情報を取りまとめましたので送付します。

1 農作物名 ジャガイモ

2 病害虫名 疫病

3 発生状況

(1) 発生地域 県本土

(2) 発生量 多

4 情報の根拠

- (1) 2016年2月15日～18日に行った巡回調査の発生ほ場率が25%（平年0%）と過去10年で最も高く、県本土では発生時期も平年より早い（表1，図1）。
- (2) 過去に疫病が多発した2010年が，2月に疫病の初発が認められ（発生ほ場率5%），3月以降も発生ほ場率が高く推移した（図2，写真1）。
- (3) 北薩地域の秋作ジャガイモでは12月に疫病が確認されており，早掘りジャガイモにつながることを予想される。
- (4) 気象庁の1か月予報では，降水量は平年並か多いとされ，今後も発病しやすい条件が続くと予想される。

表1 ジャガイモ疫病の発生状況 調査日：2016年2月15～18日

地域	調査ほ場数	発生程度			計	調査地点
		甚	多	中 少		
北薩	12			6	6	長島町
南薩	6				0	指宿市開聞
大隅	6				0	錦江町城元
計	24			6	6(25%)	

※（ ）発生ほ場率%

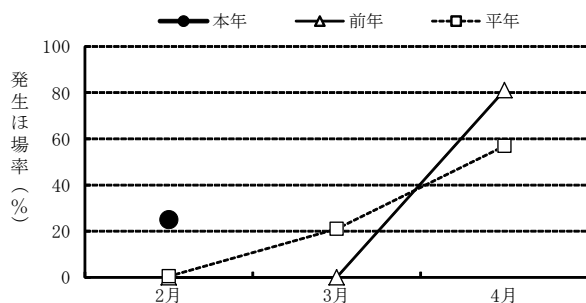


図1 疫病の発生ほ場率（ジャガイモ：県本土）

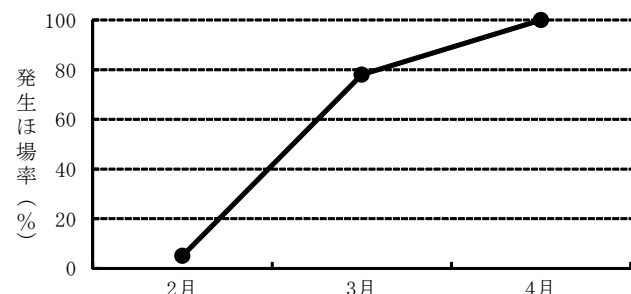


図2 疫病の発生ほ場率（ジャガイモ：県本土）
多発年：2010年

5 防除上注意すべき事項

- (1) 発生ほ場では治療効果や残効性の期待できる薬剤（表2参照）を7～10日おきに散布する。
- (2) 未発生ほ場では、防除は降雨前の予防散布に重点をおく。
- (3) 茎葉に病斑が多いと塊茎部への感染が広がるので防除を徹底する。
- (4) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤とのローテーション散布を行う。
- (5) 排水の悪いほ場では多発しやすいので、排水対策を十分行う。
- (6) 収穫残渣は次作の伝染源となるので、ほ場外へ持ち出して適切に処分する。

6 参考データ

表2 ジャガイモ疫病の主な防除薬剤の特徴

農薬名	成分名	系統名	治療効果1)	浸透移行性2)	葉内浸達性3)	残効性
エキナイン顆粒水和剤	シメキニル・ベンチアハリカルブイソプロピル	混合剤	○	○	○	◎
ザンプロDMフロアブル	アトクトラジン・ジメトモフ	混合剤		○		◎
ダイナモ顆粒水和剤	アミスルフロム・シメキニル	混合剤			○	◎
プロポーズ顆粒水和剤	ベンチアハリカルブイソプロピル・TPN	混合剤	○	○	○	◎
ホライズンドライフロアブル	シメキニル・ファミキトソン	混合剤	○		○	○
ライメイフロアブル	アミスルフロム	その他			○	◎
ランマンフロアブル	シアゾファミト	その他			○	◎
リライアブルフロアブル	フロヒコリト・プロハモカルブ塩酸塩	混合剤	○	○	○	○～◎
レーバスフロアブル	マンジプロハミト	その他			○	◎

注)○：高い，◎：特に高い

1) 感染後も効果があるが、効果持続期間は1日程度であるので本効果を過信しない。

2) 茎葉に付着した薬剤成分が吸収され、植物体内移動により上位葉にも効果が現れる効果。

3) // が内部に浸透する性質。



写真1 2010年に発生した疫病